

「貫く棒の如きもの」

去年今年貫く棒の如きもの

昭和25年に作られた高浜虚子の有名な新年の句です。

年末から新年を迎えようとするとき、私の頭の中に、必ずといっていいほどこの句が浮かんで来て、
来し方行く末をいろいろと回想、夢想しながら、勝手に句を解釈して、今年の「棒の如きもの」に頼む
ものは何だろうか、などと自省しています。

最初にこの句を知ったときには、正月のおめでたい雰囲気には、「貫く棒」とは、おどろおどろしく似
つかわしくないだろう、と違和感を覚えたものでした。しかし、過去、現在、未来という時間の悠久の
流れの中で、年の変わり目の一瞬を捉えて、そこに「棒の如きもの」が横たわっているとの発見は、め
まぐるしく変化する激動の現代にあって、心を落ち着けられる安心感を与えてくれるような気がします。
それぞれの人がさまざまな思いの中で、変わってほしくないもの、変えたくないものをお持ちのことと
思います。新年にあたってそんな思いを「貫く棒の如きもの」に託してみるのもいいのではないでしょ
うか。

同じく虚子の作句ですが、年の暮れを詠んだ私の好きな句があります。

年は唯黙々として行くのみぞ

このような達観した境地には、なかなかかなり得ませんが、とにかく平成20年は去り、新年を迎えま
した。

正月休みの時期とはいえ、この時期ならではの仕事や商売を行っている人、交替制勤務で年末年始も
仕事に出ざるを得ない人など、ゆっくりと休んでいられない方もたくさんいらっしゃると思います。ま
た、市民の安全、安心を守るために働いている警察や消防の職員の皆様や、大晦日まで年末夜警に当た
っていただいた消防団の皆様方には、本当にご苦労様です。

ぜひとも大きな事件、事故などもなく、無事に新年を迎えられ、新しい年が「貫く棒の如きもの」の
先に明るく輝かしい未来の見える年になることを願っています。

新年あけましておめでとうございます。